

金関恕・佐原眞編 『弥生文化の研究 8 祭と墓と装い』

雄山閣 '87 3200円

磯 前 順 一

文献の存在しない先史時代の宗教を論じることは難しい。そのためには、遺物・遺構・遺跡からなる考古資料の型式同定と、その記述されたデータをふまえた、人類学・民俗学・心理学・宗教学などからの宗教の観点からの研究が必要とされるが、現状としてはその両方の研究領域から顧みられておらず、その研究は遅々として進んでいない有様である。

このようななかで、青銅製祭器、墓地、ト骨、楽器、装身具、などの弥生文化の宗教側面を強く表わす考古資料を取り扱った本書のもつ意義は大きいといえる。本書は個々の研究者の書き下ろしの論文集であり、弥生時代を多面的に捉えようとする意図のもとに構成された10巻の『弥生文化』シリーズのうちの1巻となっている。これらの論文は考古資料の型式学的研究に力点を置いたものと、さらに宗教面に関する考察を試みたものとに分けることができる。前者の種類の論文として

は、岩崎二郎「支石墓」、藤田等「石棺墓」・「土壙墓」・「甕棺墓」、副永伸哉「木棺墓」、田代克己「方形周溝墓」、藤田憲司「方形台状墓」、喜谷美宣「墳丘墓」、山内紀嗣「四隅突出墓」、石川日出志「再葬墓」・「土偶形容器と顔面付土器」、馬目順一「幼児用の壺・甕棺墓」、などの墓地に関する研究。木下尚子「頭飾り」・「垂飾」・「貝符」、橋口達也「腕輪・指輪」、置田雅昭「石製玉造り」、などの装身具に関する研究、高橋護「分銅形土製品」に関する研究、木村幾太郎「刻骨」・神澤湧一「ト骨」に関する研究をあげることができる。

基本的に、これらの研究は集成した考古資料を、出土層位などをふまえながら型式分類をおこない、分類された各類の編年と分布域を定め、その変遷さらには出土状況を把握しようとするものである。型式とはビヘイビア・パターンの反映であり、山内清男が指摘し

たように、その変遷は何らかの社会的な変化を表すものと理解されている。⁽¹⁾しかし、型式をシンボルとして、或いは小林達雄の言う「範型」の表出として理解するならば、⁽²⁾それは従来研究されてきた社会・経済的な面の反映のみならず、その上部構造たる宗教・文化面の変化をも示すものと考えることができる。これは、所謂チャイルド流の典型的な考古学方法を発展させた考え方であるが、同時に、かつてチャイルドが言ったように、上述の方法のみからその考古資料の背後に潜む宗教をめぐる諸観念や、儀礼行為を推測することは難しい。⁽³⁾

一般に、遺物をはじめとする考古資料の出土状況は、何らかの使用がなされたあとの廃棄・埋納の状態を示すものであり、儀礼の進行中の様子を表わすものではない。故に、本書の墓地に関する諸論文が示すように、我々が知りうるのは埋葬がなされた後の姿であり、残された埋葬施設から葬送儀礼の諸過程を知る手がかりは殆ど残されていない。さらに、埋葬後の状況が知りうるといっても、貝塚から発掘される例を除くと、殆どの人骨は腐蝕して残っておらず、被葬者に関する性別・年令・親族構造・社会的地位などの諸情報や、執行された埋葬を規定した共同体規制がどのようなものかを知ることはできない。

但し、木村の「刻骨」・神澤の「卜骨」論文のように、遺物である動物骨に残された使用痕からト占の風習の存在や、材料とされる動物の種類・骨格部位、さらには用法の変遷を推測することのできるものもある。しかし、この場合は、後世の民俗例や大陸の研究があったために理解可能となったものであり、特例的なものといえる。やはり、従来のオーソドックな考古学的方法からのみでは、各種の形式資料およびその構造的アセンブリッチとしての社会的規模の宗教観念・儀礼行為を、考古資料から帰納的に理解することは困難である。先史時代の宗教の理解を可能にするためには、そこに何らかの理論にもとづく。考古資料の演繹的理解が必要とされる。しかし、そのためには、厳密な考古学的方法

による資料分析が不可欠であり、考古学資料の正しい理解のないところには、いかなる立派な理論も、恣意的な砂上の楼閣に過ぎないのである。

その意味で、今日までの資料をまとめて整理した上述の諸論文は、今後の研究の基礎となりうるものとして、高く評価することができる。但し、考古学的研究におけるこれからの課題として、型式学的に整理された各形式の資料を個々に研究するだけでなく、時期・地域的に限定されたひとつの文化に属する資料の総体・組成（アセンブリッチ）として、弥生文化の構造的な理解をおこなうことが必要である。先史時代の考古資料は殆どすべてのものが、多かれ少なかれ宗教性質を帯びていると考えられるが、実際の研究において初めからすべてを取り上げるのは容易ではなく、具体的にどの資料を組み合わせる選択するのか、ということ自体が宗教研究の前提になる。また、今日、国家形成要因のひとつとして弥生文化のもつ地域差が問題にされているなかで、宗教面に関しても各地域における内容の違いを明らかにすることが求められる。

次に、宗教的な側面への考察を試みたものを紹介することにしたい。金関愨による「総論」は魏書の馬韓・倭人に関する記述をもとに、鳥形木製品などの背後に祖霊・穀霊の神観念の存在を想定し、鳥杆からその祭儀を復元しようとしている。甲元眞文の「鏡」は東北アジア諸民族の例やエリアーデの研究を参考に、日本における鏡の意味をシャーマニズムに求めたものである。また、大林太良の「縄文と弥生の墓—民族学的解釈—」は、ニューギニア諸島・東南アジア地域などの未開農耕民との共通性から、墓域を内側に含む縄文時代の集落が定住・単系出自集団であること、及び記紀神話の始源の島「オノゴロ島」から弥生時代の方形周溝墓が「死と生のアンビバレンツ」な性質をもつことを想定している。

水野正好の「楽器の世界」は、従来の型式学的研究をふまえて、弥生時代の陶損・銅鐸

・琴、および他の楽器となりうる可能性のある遺物を考慮しながら、その用法を考え、これらが中国・朝鮮半島の影響下に成立したものである、という系譜的な位置付けをおこなっている。国分直一の「弥生から現代へー民俗の系譜」は、現代に伝わる民俗例、また魏書や風土記の記述から、弥生時代の遺物のモチーフを解釈し、蛇霊・龍神信仰の存在とその変遷を論じたものである。同様に、深澤芳樹の「弥生人の美意識」は、人物像をとりあげて、弥生時代のモチーフと縄文・古墳時代のものとの比較をおこない、その特徴を多様な身振りに求めている。また、中村友博の「武器形祭器」は、その背後に模擬戦を想定し、大型青銅器との比較から当時の祭祀の重層性を指摘している。この他に、宗教面に関する研究ではないが、抜歯のタイポロジーから弥生時代の親族構造を考察した、春成秀爾の「抜歯」の論文も収められている。

これらの論文は、従来の考古学的成果をふまえながら、民俗学・人類学・神話学などの知見をもとに、弥生時代の宗教側面を明らかにしようとしたものであり、考古学からの宗教研究としては、最も典型的なものである。これらの論文が今後の研究の礎石となり得るのか、それとも単発なものに終わってしまうのかというところに、今後の日本における先史時代の宗教研究の発展性の成否がかかっているとさえ言えよう。かつて、歴史学者原秀三郎は考古学における唯物史観的歴史研究の自己流で閉鎖的な在り方を、「概念の任意性や『理論』の孤立化」と批判したが、⁽⁴⁾それは同時に宗教理論の貧困さにも当てはまることであった。それは、明治期の人類学から考古学が分離してゆくなかで、宗教研究が途絶えてしまったこと、明治期の人類学の宗教研究自体も石器時代人種論争に従属したかたちでなされ、宗教理論に関する十分な議論がおこなわれなかったことが、大きな原因となっていると思われる。しかし、そのために、田中琢が本書所収の論文「銅鐸文化圏」と「銅剣・銅矛文化圏」のなかで指摘するように、これまでの考古学による研究成果を軽視し

た、空想的ともいえる解釈の横行が許されてしまっており、その最たる例が島根県の荒神谷遺跡をめぐる出雲王朝説であるといえよう。

学史的にみて、日本における先史時代の宗教研究は、坪井正五郎・鳥居龍蔵を代表とする研究者によって、明治期以降の人類学のなかで一世を風靡した日本石器時代人種論争の一環として登場し、コロボックル・アイヌなど、各研究者の主張する人種説の正統性の証拠とするためになされてきた側面が強い。その頃は、イギリスの人類学や広汎な民族誌の知識があったとはいえ、我が国にモンテリウス流の考古学が成立する以前であり、当時の研究者の立論の土台となる考古資料の分析は、未だ、稚拙な域をでないものとならざるを得なかった。

時代が昭和に移り、山内清男・甲野勇・八幡一郎の編年学派が考古学的方法にもとづき土器型式の編年研究を推し進めるなかで、当然のことながら、それまでの恣意的な遺物研究は批判され、過去のものとして否定されることになった。そして、考古学は人類学から独立・分離してゆき、東京人類学会を中心とする人類学も形質人類学へその方向を転換していった。この人類学と考古学の転換期の前後には、人種論争の中心人物であった坪井がペテルブルグで客死し、人種論は自然科学的な形質人類学分野でなされるようになり、鳥居の人種論も甲野らによって考古資料の型式学的方法の誤りを指摘される。

このようにして先住民論争は衰退し、明治期の人類学から分化した考古学および形質人類学は先史時代の宗教的研究を対象とするものではなかった。人骨に対する自然科学的なデータ研究をする形質人類学においてそれは当然のことであるが、主に原始時代の文化遺物を扱う考古学においても、土器型式の編年確立が急務とされ、ダーウィニズムを援用した型式学が主流になるようになってゆく。さらに、和島誠一らによって考古学の主対象とする原始社会が唯物史観による歴史学研究のなかに位置付けられるに至って、先史時代の宗教研究は考古学のなかで傍流化していっ

た。

特に、大陸にも日本に関する文献がなく、土器の型式的研究が中心とならざるを得なかった縄文時代に関する宗教研究は少なく、今日に至っても宗教に関する解釈はおろか、土偶・石棒などの宗教面の色彩を最も強くもつと思われる遺物の型式的研究さえ満足にされているとは言えない。この状況は弥生・古墳時代についても、基本的には変わらないものである。確かに、当時の社会・文化を記述した中国・朝鮮や国内の文献がみられるようになり、時代が農耕社会に移行して後世の社会の習俗・宗教との共通性の存在が考えられるようになったため、縄文時代に比べてその宗教側面に対する考察が可能にはなっている。実際に、金関丈夫による民俗学的な研究、大場磐雄による神道考古学研究などの立派な業績もある。しかし、概して、肝心な考古資料の型式学的研究が曖昧なままにされていたり、民俗・民族例に安易に依拠するところがみられ、やはり、同時代の政治・経済研究に比べると、考古学的研究の遅れと宗教理論の貧困さは否めない。

確かに、考古学が一個の学問として確立した後も、日本の先史時代に対する宗教研究はなされてはいた。それは、先述のような考古学を主領域とする者からのほかに、考古学の部外者からのものもあったが、前者においては不十分な理解のもので理論の援用、後者においては安易な考古論文への依拠がみられ、次なる研究展開へ連なるような、学史的に評価されようなものは、極めて少ないと言えよう。そのために、考古学の分野においては、宗教研究に対するアレルギーに近いともいえる不信感が広まっている。

このような状態を打開するためには、これまで述べてきたような考古資料の型式分類、及び編年・分布の把握と、その結果を宗教面の次元に解釈できるような理論の協力が必要とされる。そのためには、今後、民俗学・歴史学はもとより、人類学・心理学・神話学・宗教学などとの学際的な研究をしてゆかなければならない。しかし、他領域の理論・成果

への無批判な依存は慎まなければならない、自分が用いようとする理論・事例がどのような方法のもとに生みだされてきたのか、果たして、それが考古資料をどのように扱う場合に適したものか、ということを考慮し、他者からの批判に耐えうるだけの理論の強靱さを養わなければならない。例えば、事象から導き出された実体概念と、事象を解釈するための分析概念は理論上区別されていなければならない。他分野の理論を考古資料の解釈に援用する場合は、実体概念が分析概念に転用されるのであり、その転用には何らかの手続きが必要とされる。それに加えて、型式学的研究を無視したような考古資料の恣意的解釈への自戒、そして研究目的の明確な自覚が、研究者自身に強く課されなければならない。

本書も上記に指摘したような、日本の先史時代の宗教研究のもつ限界性を打破しているとはいえないが、まとまった試みのものとして、また、現時点の水準としては粒揃いの質の高い研究として、評価できるものである。そして、今後とも、本書のような試みがなされていくことによって、研究の水準が高められてゆくのであろう。なお、当書評は、本書の性質に沿って考古学側からの視点に主眼を置いて述べたものであり、考古学とかかわってきた神話学・民俗学・人類学などにおける先史時代の宗教理論、およびその解釈方法の問題については、後日、稿を改めて考えてみたいと思う。

(注)

- (1) 山内清男「縄文時代研究の現段階」『山内清男・先史考古学論文集 新第五集』1972 196-197頁。
- (2) 小林達雄『日本原始美術大系 縄文土器』講談社 1977
- (3) V.G.チャイルド『考古学の方法』1956 (近藤義郎訳) 河出書房新社 1978 74-75頁。
- (4) 原秀三郎「日本における科学的原始・古代史研究の成立と展開」『歴史科学大系 日本原始共産制社会と国家の形成』校倉書房 1972 395頁。